

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770139

研究課題名(和文) 音声学的視点を踏まえた現代日本語文法記述の精緻化の試み

研究課題名(英文) An attempt to refine the description of Japanese Grammar from the viewpoint of phonetics

研究代表者

岡田 祥平 (OKADA, Shohei)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：20452401

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代日本語文法研究の記述研究の成果を、音声学的視点を踏まえて再検討することを目的として行った。具体的には、「同意要求」の「新表現」とされる「～クナイ?」を題材に、「確認要求」と「同意要求」の相違の検討や文法的意味の違いによる音調の異同の観察、さらには、Twitterを利用した「～クナイ?」の前節要素の使用実態調査などを行った。

研究成果の概要(英文)： In this project, I tried to refine the description of Japanese Grammar from the viewpoint of phonetics through analyzing "kunai?" i.e. the "new" expression of soliciting agreement. The studies I did in this project are given as follows. (1) Examining the distinction of meaning between the expression of soliciting agreement and the expression of requesting confirmation. (2) Observing the distinction of intonation and accent between the expression of soliciting agreement and the expression of requesting confirmation. (3) Examining the actual condition of enclitic element of "kunai?" using Twitter.

研究分野：日本語学・音声学・社会言語学

キーワード：イントネーション アクセント 音調 とびはね音調 同意要求 確認要求 Twitter

### 1. 研究開始当初の背景

現代日本語文法研究が「先細りしつつあることは疑い得ない」という見解がある(庵功雄 2012)。しかし、現代日本語文法研究の「対象の中心は文章語であった」(林 巨樹 2007)ことも関係しているのかもしれないが、現代日本語の音声に主な関心に向ける研究代表者が現代日本語文法研究の記述に触れた際、音声の諸要素を考慮に入れると、別の結論や更に精緻な記述が導き出せるのではないかと思われる場合も少なくない。すなわち、本研究では、現代日本語文法研究の記述研究の成果を、音声学的視点を踏まえて再検討することを目的として開始した。具体的には、現代日本語文法研究で記述された文法的意味を、音調を考慮に入れて再検討し、現代日本語文法記述研究のさらなる精緻化を目指す試みとして本研究を位置づけ、本研究を開始した。

#### 〔参考文献〕

- 庵 功雄 (2012) 「第2版まえがき」『新しい日本語研究入門ことばのしくみを考える 第2版』スリーエーネットワーク  
林 巨樹 (2007) 「口語文法」飛田良文 (編集主幹) 『日本語学研究事典』明治書院

### 2. 研究の目的

現代日本語文法研究の成果を参照すると、音声の諸要素、特にイントネーションやアクセントによる声の高さの動態(以下、「音調」と記す)が考慮に入れられていないものも多く、現代日本語の音声に関心のある研究代表者が現代日本語文法研究の諸文献を読んだ際には、その文献において論じられている現象(例文)が、どのような音調を想定して論じられているのか、疑問に感じる場合も少なくない。具体的には、(1)のような記述を見かけるといった場合が、しばしば存在する。

- (1) 「X」という言語形式が...  
→例文1のような形・文脈で使用された場合：【A】という文法的意味  
→例文2のような形・文脈で使用された場合：【B】という文法的意味

しかし、研究代表者が自身の内省をもとに、音調を考慮してそこに示されている例文を検討すると、(2)のような結論になるのではないかと思う場合も、少なくはない。

- (2) 「X」という言語形式が...  
→例文1のような形・文脈で使用された場合：文末が上昇調であれば【A】という文法的意味  
→例文2のような形・文脈で使用された場合：文末が上昇下降調であれば【B】という文法的意味

### 文 法的意味

文末が下降調であれば【A】という文法的意味

上述したような違和感(音調のことを考慮に入れていないのではないかという違和感)は、特に相手(聞き手)に働きかける機能を持つ諸表現(疑問文、質問文、確認文など)を記述した諸文献を読んだ際、を覚えることも多い。それは、それらの表現は、基本的には書き言葉では使われない(森山卓郎 2003)、すなわち、音声化して使用されることが前提であるにもかかわらず、音調に代表される音声の諸要素が考慮されていない(あるいは重要視されていない)ためだと考えられる(なお、この点に関しては、「わが近代文法論は文語中心であったため、口語文法の記述の方法も、その影響を脱していないし、対象も文章語中心であった」(林 巨樹 2007)という背景が深く関係しているのであろうし、現代日本語文法研究の成果に対し、闇雲な批判を行う意図はまったくなく、念のため、付言しておく)。

もっとも、従来の現代日本語文法の諸研究も音調を全く考慮していないというわけではない。現代日本語の諸研究で示される例文において、特に文末の音調が矢印で記載される場合も多い。また、「上昇調」と「下降調」とに二分して、議論をされていても、それは音声学的な精緻な記述とは程遠く、読み手が矢印から音調を「復元」することは不可能である。さらに、文末の音調は「上昇調」と「下降調」の2種類では記述しきれないことが、現代日本語イントネーションに種々の先行研究からすでに明らかになっている。以上のような観点からからも、現代日本語文法の研究の成果を、音声学的視点取り入れた(再)検討することを目的に、本研究を実施した。

#### 〔参考文献〕

- 林 巨樹 (2007) 「口語文法」飛田良文 [編集主幹] 『日本語学研究事典』明治書院  
森山卓郎 (2003) 「話し言葉と書き言葉を考えるための文法研究用語・12」『国文学解釈と教材の研究』第48巻第12号

### 3. 研究の方法

「2. 研究の目的」で述べたことを実施するために、どのような言語形式を取り上げるのか、様々な可能性が存在するが、本研究では、現代日本語文法研究で明らかにされた文法的意味の中でも、確認要求表現と同意要求表現、中でも「同意要求」の「新表現」とされる「～クナイ?」(高木千恵 2009・平塚雄亮 2009)に焦点を当てることにした。それは、主に以下の二つの理由による。

- (1) 確認要求表現、あるいは同意要求表現は「相手の会話を引き出すもの」で、「基本的

には書き言葉では使われない」、「特定の聞き手へ向けた「聞き手目当て」の表現（森山 2003）であるため、確認要求表現、あるいは同意要求表現を分析、考察する際には、音調の側面も考慮に入れる必要性が高いこと（なかでも、本研究で取り上げた「同意要求」の「～クナイ？」は「新表現」とされ、現時点では主に音声言語に観察されるため、音調の側面からの考察も必須になると考えられる）

(2)本研究で取り扱う「同意要求」の「新表現」とされる「～クナイ？」は、（首都圏方言では）「とびはね音調」と呼ばれる「新しい」音調で実現されることが指摘されている上に、「とびはね音調」が「同意要求」専用の音調であるのか、議論の余地があること（これらの点については、田中ゆかり 2010 に収録されている諸論文を参照のこと）

以上の2点を明らかにするために、まず、現代日本語文法の先行研究も参考にしつつ、「確認要求」と「同意要求」を（本研究では）「話し手の発話意図」と「当該発話内容に関する、話し手と聞き手の情報量の差」という2点から区別し得る表現位置づけた。

(3)「確認要求」

- ・話し手の発話意図：話し手が聞き手に発話内容の妥当性を判断してほしい
- ・当該発話内容に関する、話し手と聞き手の情報量の差：話し手 < 聞き手

(4)「同意要求」

- ・話し手の発話意図：話し手が聞き手に発話内容について同意をしてほしい（発話内容の妥当性の判断を聞き手には要求していない）
- ・当該発話内容に関する、話し手と聞き手の情報量の差：問わない（次の3パターンが存在し得る。話し手 = 聞き手。話し手 < 聞き手。話し手 > 聞き手）

次に、「同意要求」の「新表現」とされる「～クナイ？」について、「クナイ」に前接する要素のそれぞれについて、「確認要求」の場面と「同意要求」の場面を設定した例文を用意し、その例文に対する音声を「シミュレーション法」（郡 史郎 2006）で収録し、収録した音声について音響分析を行い、音調の分析を行った。なお、「クナイ」に前接する要素は、品詞（形容詞・形容動詞・名詞）、アクセント核の有無、モーラ数を考慮したものを用意した。なお、「クナイ」はもともと形容詞の否定形の際に現れる形式であるが、平塚 2009 では「同意要求」の「新表現」とされる「～クナイ？」の前接する要素の品詞は形容詞以外もありうる旨指摘されているため、本研究では、さまざまな品詞を「クナイ」の前接要素として設定した次第である。また、「同意要求」の「新表現」とされる「～クナイ？」の例文において、前接する要素と

して使用した語のうち形容動詞・名詞については、「正用」の表現である「～ジャンナイ？」に前接する例文も作成した（つまり、例えば形容動詞「元気だ」の場合は、「元気くない？」という表現を使用した例文と「元気じゃない？」という表現を使用した例文を、それぞれ作成したということである）

なお、例文は、話し手「確認要求」と「同意要求」に対する聞き手の反応として、「クナイ」を使用した「否定表明」（話し手が提示した発話内容に対する否定を表明する）を行う設定とした。そして、話し手の「確認要求」に対する聞き手の「否定表明」については、さらに話し手が「クナイ」を使用した「納得表明」を、話し手の「同意要求」に対する聞き手の「否定表明」については、さらに話し手が「クナイ」を使用した「反問」を、それぞれ行うという一連のやりとりを、音声収録の例文として用意した。具体的には、以下のようなやりとりである。

・「クナイ」に前接する要素が「眠い」の場合

（「確認要求」あるいは「同意要求」の場面設定を提示）

話し手： 眠くない？

（「確認要求」or「同意要求」）

聞き手： ううん、眠くない。

（「否定表明」）

話し手： そう、眠くない。

（話し手の第1発話が「確認要求」の場合で「納得表明」）

え、眠くない？

（話し手の第1発話が「同意要求」の場合で「反問」）

以上のようなやり取りを設定することで、様々な文法的意味の「クナイ」の音声を収録することが可能となる。ただし、例文として設定した「クナイ」に対する音声収録協力者の容認度は様々であったことは、付記しておく（すなわち、例文として提示したものの、音声収録協力者からは「このような言い方は自分ではない」「このような発話意図の場合にこのような言い方をすることは難しい」という反応もあったということである）

〔参考文献〕

- 郡 史郎（2006）「対人関係・対人態度を反映する韻律的特徴 特に目上に対する話し方について」土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会（編）『日本語の教育から研究へ』くろしお出版
- 高木千恵（2009）「関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイ」『日本語の研究』第5巻第4号
- 田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院
- 平塚雄亮（2009）「動詞肯定形に接続する同意要求表現クナイ（カ）」『日本語文法』9

#### 4. 研究成果

前節で述べたような手法で進めた本研究で得られた成果を簡潔まとめると、以下のようになる。

- (1) 形容詞を使用した例文の場合、「～クナイ」の「ナイ」のアクセント核が音声的に実現されない現象は「同意要求」、「反問」のみで発生していた。また、「ナイ」のアクセント核が音声的に実現しない「同意要求」、「反問」での文末音調は、郡 史郎(2003)のいう「疑問型上昇調」と「強調型上昇調」に相当すると考えられる音調が、双方の文法的意味が同程度、使用されていた。つまり、この結果は、「ナイ」のアクセント核が音声的に実現しない「同意要求」、「反問」を、文末音調のパターンでは区別することは難しい、ということを示唆していると考えられる。

また、「確認要求」の例文では、「～クナイ」の「ナイ」のアクセント核が音声的に実現され、文末音調は「疑問型上昇調」が使用される傾向が認められた。さらに、「納得表明」、「否定表明」は、共に、「～クナイ」の「ナイ」のアクセント核が音声的に実現され、文末音調は郡(2003)のいう「下降調」に相当すると考えられる音調が使用される傾向が認められた。

- (2) 形容動詞を使用した例文の場合、全体的には「～クナイ?」と「～ジャナイ?」の音調に大きな差は無いと考えられる。ただし、「～クナイ」を使用した「納得表明」の例文においては、文末の音調が「下降調」となる傾向が顕著であったのに対し、「～ジャナイ」の場合はばらつきが見られた。また、「～クナイ」を使用した例文においては「ナイ」のアクセント核が音声的に実現されることが優勢であるのに対し、「～ジャナイ」を使用した例文においては「ナイ」のアクセント核が音声的に実現されない場合も観察された。
- (3) 名詞を使用した例文の場合、「～クナイ?」及び「～ジャナイ?」の双方、「同意要求」と「反問」の例に文においては、「ナイ」のアクセント核が音声的に実現されない場合が優勢であった。また、「～クナイ?」にアクセント型が起伏型の名詞が前接する場合、その名詞のアクセント核が音声的に実現されない場合が観察された。
- (4) ただし、上記の結果のうち、(1)の形容詞以外については、音声収録協力が「そもそも、そのような言い方はしない」という例文も多かったため、結果の妥当性については議論の余地がある。

なお、本研究の例文作成に当たり、「同意要求」の「新表現」とされる「～クナイ?」の前接する要素としてどのようなものか使用されているかを調べるに当たり、Twitterを利用して用例を収集した。その結果、日本語研究資料としてのTwitterの性格を模索、考察する必要性を強く感じたため、この方面の研究を精力的に進めることにした。その結果、日本語研究資料としてのTwitterは「音声言語を文字化した」、「話し言葉と書き言葉の中間形態」であるという見方(石黒 圭 2014)をされる傾向にあるが、そのような見方は必ずしも正確ではなく、Twitterには「音声言語を文字化した」、「話し言葉と書き言葉の中間形態」以外にも様々な日本語が格納されているということを整理して示すことができた(計量的な傾向を示すこともできた)。

#### 【参考文献】

- 石黒 圭(2014)「指示語に見るニュースの話し言葉性」石黒 圭・橋本行洋[編]『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房  
郡 史郎(2003)「イントネーション」上野善道[編]『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』朝倉書店

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 【雑誌論文】(計 7 件)

- (1) 岡田祥平・西川由樹、「日本語研究資料としてのTwitter—コミュニケーション構造の観点から—」、『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』, 査読無, 第9巻第1号, 2016年, pp.93-111
- (2) 岡田祥平、「大学生のためのTwitterリテラシー入門」、『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』, 査読無, 第8巻第1号, 2015年, pp.49-66
- (3) 岡田祥平、「現代日本語の表記と書体の多様性—パラ言語情報と非言語情報—」『ことばとくらし』, 査読無, 27号, 2015年, pp.46-48
- (4) 岡田祥平、「新語・流行語に与えるマス・メディアの影響力—「壁ドン」の二つの意味を例に考える—」、『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』, 査読無, 第7巻第2号, 2015年, pp.271-295
- (5) 岡田祥平、「インターネット上に観察される略語—ツイッターと「質問サイト」を対象とした研究の可能性—」, 岡田祥平, 『日本語学』, 査読無, 第34巻第2号, 2015年, pp.4-16
- (6) 岡田祥平、「「Twitter」のカタカナ表記は「トゥイッター」か「ツイッター」か—外来語受容における「原音主義」と「慣用主義」の相克—」, 『新潟大学教育学部研究紀

要 人文・社会科学編』, 査読無, 第 7 巻  
第 1 号, 2014 年, pp.49-68

- (7) 岡田祥平, 「言語版「ジョハリの窓」の  
提案」, 『ことばとくらし』, 査読有, 26 号,  
2014 年, pp.1-14

〔学会発表〕(計 8 件)

- (1) 岡田祥平, 「国会では「手話」がどのよ  
うに論じられてきたのか—「国会会議録検  
索システム検索用 API」を利用した経年的  
な考察—」, 社会言語科学会第 41 回研究大  
会, 2018 年
- (2) 岡田祥平, 「日本語研究者・日本語教育  
関係者にとっての「現代日本社会の『多言  
語』」化とは何か—「日本語研究・日本語  
教育文献データベース」を利用した経年的  
な考察—」, 2017 年度日本語教育学会秋季  
大会, 2017 年
- (3) 岡田祥平, 「“日本における「多言語」”  
を国会はどのように論じてきたのか - 「国  
国会議録検索システム」を利用した経年的  
な考察の試み - 」, 平成 29 年度新潟県こ  
とばの会研究集会, 2017 年
- (4) 岡田祥平・西川由樹, 「Twitter の言語資  
料的性格—発信者と受信者の関係性の観  
点から」, 社会言語科学会第 37 回研究大会,  
2016 年
- (5) 岡田祥平, 「現代日本語の表記と書体の  
多様性—パラ言語情報と非言語情報—」,  
平成 26 年度新潟県ことばの会研究集会,  
2014 年
- (6) 岡田祥平, 「「爪痕を残す」の「新用法」  
について」, 日本語学会 2014 年度秋季大会,  
2014 年
- (7) 岡田祥平, 「現代日本語の音韻体系にお  
ける〔トゥイ〕音の位置—借用語のカタカ  
ナ表記から考える—」, 新潟大学言語研究  
会第 58 回研究発表会, 2014 年
- (8) 岡田祥平, 「facebook 上の英語の中に観  
察される日本語—「インターネット上での  
言語接触」研究の試み—」, 日本語学会 2014  
年度春季大会, 2014 年

〔図書〕(計 1 件)

- (1) 真田信治監修, ひつじ書房, 『関西弁事  
典』(岡田祥平, 「音声(音便)」を執筆),  
2018 年, pp.134-140

〔産業財産権〕

- 出願状況(計 0 件)  
○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

該当なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡田 祥平 (OKADA Shohei)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号: 20452401

(2) 研究分担者  
なし

(3) 連携研究者  
なし

(4) 研究協力者  
なし